



TITLE:

世界のいろいろ

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 世界のいろいろ. 天界 1941, 21(236): 295-299

ISSUE DATE:

1941-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168112>

RIGHT:

世界のいろく

山本一清

人間は理想に憧れる本能を有つてゐるため、昔から、天上や地下にユートピアを期待した。それも望遠鏡が發明されるまでは單なる空想に過ぎなかつたが、望遠鏡が星の像を吾人に近づけるやうになつてからは、理想世界の觀念が甚だ具體的になつて來たのは無理もない。例へば第十八世紀の末にキリヤム・ハーシエルは太陽が常夏の世界であると考へたこともあるし、其の他、月や金星や火星、木星などの遊星は、望遠鏡による觀察が進めば進むほど、此等の世界が種々の點に於いて吾が地球世界と引き比べられて、天文家や一般知識人をスチミュレートしたものである。

天空に見える諸種の世界の中で、最も詳細に其の真相を吾人に暴露してゐるのは何と言つても月世界である。月が地球から僅々十萬里の距離にあることや、其の直徑が地球の四分の一であることなどは大昔から知れてゐたが、望遠鏡に

よつて其の表面に山や野や谿谷や「海」や、其の他さまざまな地形が手に取る如く明瞭に見えるものだから、學者たちは月世界をもはや自己の邸園のやうに心得て、勝手に名を附けたり、山や海を測量したりして、餘す所が無い。月世界には絶對に雲霧が無いため、地球の方さへ晴れてゐれば、何時でも其の隅々までを觀察することが出来る。實際、今日の月世界の消息は、吾々の地球界よりもよく知られてゐる有様で、只、残念なことは、運行の都合上、月のあちら側が地球からは見えないことと、適當な飛行機が無くて、月へ行つて見られないことなのだが、しかし、實際行つたつて、月は水も空氣も無い裸の世界であるし、温度は晝間が百二十度(攝氏)、夜間が負百度といふ猛烈さだから、やはりむしろ地球から望遠鏡で眺めてゐる方が安全であり、確實である。

月に次いで詳細に知られてゐるのは火星の世界である。地球から火星までは最近距離が千三百万里もあり、直徑が地球の約半ばであるから、火星の表面が月世界ほど明瞭に見えないのは止むを得ない。しかし其れでも過去三百年間の

研究によつて、この火星には晝夜や四季の變化があり、其れにつれて、南北兩極地方に氷雪の増減する模様や、又、溫帶や熱帶方面には植物の繁茂する状態も見えるし、尙ほ「運河」と稱する不思議な線條が幾百里にわたつて星の表面を縱横する有様など、むしろ或る意味に於いて、火星は生きてゐる世界である點に於いて、死んだ姿の月の世界よりも遙かに吾人の興味をそゝる。溫度は夏の炎天下が二十度前後、又、兩極が負七十度ぐらゐであるから、決して之は吾人に堪えられないものではない。只、地球に比べて火星世界の大氣は淡く、約百分の一氣壓ぐらゐであるから、將來、誰か、飛行機で行く場合にも、(衣類は有り合はせもので充分だが)空氣と食物とは持參しなければならぬ。

月や火星のほかに、金星と木星と土星の事狀は可なり分つてゐる。金星の世界は其の大きさが殆んど我が地球と瓜二つであるが、太陽に近いたため、光や熱を地球の二倍も受けるので、之れこそ實に常夏の世界である。しかし、この星は濃厚な炭酸ガスの大氣に包まれ、全く天日を遮るほどに雲霧が垂れ込めてゐる。

るので、生物の住み家としては、よほど地球と趣きを異にしてゐると考へなければならぬ。

木星と土星とは何れも地球の直徑の十倍ほどの大きさを有つ世界で、其の自轉週期もほゞ十時間内外といふ點など互ひによく似てゐるが、太陽からの距離は、木星が一億九千萬里、土星が三億六千萬里であるから、受ける光と熱とは比較的貧弱で、其の表面は零下百何十度といふ溫度のメタン・ガスやアムモニヤ・ガスで厚く取り巻かれてゐる。生物などには全く縁の無い世界である。一年の長さも、木星は地球の十二ヶ年弱に當り、土星は二十九ヶ年半に當るし、又、自轉軸の傾斜も殆んど言ふに足りないものであるから、地球や火星に見るやうな春夏秋冬の季節の變化などは全く見られない。しかし、木星にしても、土星にしても、未だ自熱を多分に有ち、地球などよりもウンと若い星であるから、今後、尙ほ永い將來を有つてゐるし、従つて、幾億年の末には、一度は地球や火星のやうな世界の姿を現はすかも知れない。

吾が太陽系のメンバの中には、土星よりも遙かに遠い所に、天王星、海王星、冥王星などといふ世界がある。其のうち、天王星と海王星とは、星の大きさも、引力の強さも相當なものであるし、堂々たる世界であるらしいと想像されるが、しかし、なにぶんにも七億里以上も吾々から離れてゐるので、今日の望遠鏡の力では、果して此れ等がどんな世界であるのだから、殆んど分らないと言つて好い。若しも只の想像だけを茲に述べることを許されるならば、此の二つの世界は、やはり木星や土星に似てゐるものと考へられる。従つて、地球などよりもよほど若いわけである。

最後に、冥王星は、近年発見された星であるだけに、更に不明の點が多いのであるが、光度が案外に弱いことから判斷して、此の世界は、水星や月の状態に近いものと一般には考へられる。

結局、吾々地球人に取つて、最も恵まれた理想の世界は、吾が地球よりほかに殆んど見當らないといふことになる。尤も幾億年の過去や將來は保障の限りではない。